

学校心理士会神奈川支部ニュースレター

第 10 号



2011年9月11日発行

発行責任者 岡田守弘

芳川玲子

〒259-129

平塚市北金目 4-1-1

平成23年度神奈川支部総会 報告

1. 日時 6月19日(日) 14:00~14:30
2. 場所 かながわ労働プラザ(エルプラザ) 多目的ホール
3. 総会の議事と審議結果
 1. 開会
 2. 支部長挨拶 田村順一(副支部長)
 3. 議長選出 石綿一弘氏を選出
 4. 議事
 - (1) 第1号議案 平成22年度事業報告.....承認
 - (2) 第2号議案 平成22年度決算および監査報告.....承認
 - (3) 第3号議案 平成23年度事業計画.....承認
 - (4) 第4号議案 平成23年度予算.....承認
 - (5) 第5号議案 役員の変更.....承認

(参考)

1. 平成22年度事業報告
 - (1) 総会を紙面総会として行い承認された
 - (2) 2010年度日本学校心理士全国大会開催
平成22年8月21・22日 東海大学湘南キャンパス
テーマ「拓く、つながる学校心理士の未来へ」
 - (3) 研修会
 - 第25回研修会 平成22年11月21日(ウイリング横浜)
テーマ:協力的集団体験を通して中学生の自己評価を高める教師の援助的介入
—文化祭での学級劇活動に焦点をあてて—
講師:樽木 靖夫(帝京科学大学)
 - 第26回研修会 平成22年2月27日(平塚市中央公民館)
テーマ:非行臨床の理論と実際
講師:村尾 泰弘(立正大学)

2. 平成23年度事業計画 [研修会]

第27回研修会 平成23年6月19日(日) かながわ労働プラザ (エルプラザ)

テーマ：子どものこころが不安に覆われた時—学校がこころの支えになるには—

講師：玉井 邦夫 (大正大学)

第28回研修会 平成23年10月16日(日) ウィリング横浜

テーマ：台湾の特別支援教育～システム、インクルージョン学級、訪問療育師について～ (仮題) (総会時にお知らせしたテーマ、講師は変更になります)

講師：曹純瓊 (輔英科技大學) 通訳：芳川玲子 (東海大学)

第29回研修会 平成24年2月26日(日)14:15分受付 かながわ県民活動センター

テーマ：「子どもたちのよりよい人間関係をめざして」

～かわさき共生・共育プログラムによるいじめ・不登校・学級崩壊をなくす挑戦～

講師：川崎市教育委員会 教育改革推進担当 担当課長 小川 俊哉

3. 東日本大震災支援募金

平成23年度神奈川支部年会費より60,000円を東日本大震災支援募金として支出する。

※総会時配布資料

総会時に、NASP (アメリカ学校心理士会) による「災害で転校した『特別な教育ニーズのある子どもたち』への支援：受け入れ校へのアドバイス」を邦訳した資料が配付されました。これは、被災地から転居せざるを得ない子どもたちや家族への支援についてのアドバイスをまとめたものです。具体的には、次のような3点が読みとれます。

- ①被災地から転校してくる子どもについて正式な資料が失われている場合がある。そのような場合には、一時的な書類を作成し、転入学を延期させずに受け入れること。
- ②特別支援教育を必要としながら「個別教育支援計画」がない状況もあり、柔軟に対応すること。深刻なトラウマを経験したケースもあり、過去に深刻な問題行動が報告されていない子どもについての「情緒障害」や「行動障害」などの分類は慎重に行うこと。
- ③特別な教育ニーズのある子どもの保護者は、移転先での援助資源について知る機会を必要としている。そのため情報の整理・提供に特別支援教育コーディネーター、スクールカウンセラー、ソーシャルワーカーや養護教諭が応えることも望まれている。



第27回研修会報告

日時 平成23年6月19日

場所 かながわ労働プラザ (エルプラザ)

「子どものこころが不安に覆われた時—学校がこころの支えになるには—」

講師 大正大学 玉井 邦夫 先生

【研修の概要】

◆これまでの特殊教育は通常級と特殊学級、地域の学校と養護学校という「場」による構造的な保障をしていた。特学から通常級への交流は行われていたが、その逆は想定外という仕組みになっていた。特別支援教育への政策転換は、教育の場の保障から内容の保障へという量から質への転換だった。通常級にも個別的な教育ニーズを有する子どもがいるという認識は、個別化した支援を、学校の機能として求めることになった。

◆発達障害らしき大人はたくさんいる。適切な支援を受けて、或いは特別な支援を受けなかったにもかかわらず自己認知ができ適応できてきた人たち。早期発見といわれているが、どこで障害のレッテルが外れるかわからない子どもに強引に診断を下すことになってはならない。本当に親子が「困った」となるまで致命的な傷を与えずに見守ることができるようにしたい。

◆発達障害の子どもたちはどのように世界を捉えているのか。目詰まりしている。でも本人にはそれがすべての世界。発達のはらつきは誰にでもある。関係性次第でやっていける。障害を特性で語るか、関係性で語るか。一つの事象の両面として捉えられる。

◆小学校 1, 2 年生は担任の先生が絶対的な存在。3, 4 年生の学級経営がその後の学校生活にとってとても大事になる。学級経営そのものにソーシャルスキルトレーニング的な発想があるか。子どもたちに、モデルとなる大人、仲間との体験があって欲しい。子どもたちは自分とどう折り合いをつけていくのか。家庭の中でのその子の存在はどうか。

◆学校での支援の必要性が見えた時、支援者が本当に困るのは「困っていない親」だ。保護者には、つぶれない程度に困っていてほしい。発達の段階の認識が保護者と支援者で同じであってほしい。家庭内のことに源があってもリスクは学校に来る。学校が単体では関われない。保護者は「家では困っていない」と言う。困っていないと自分に言い聞かせる。ここで困ってしまったら、もっと困った状況になる。「子どもの障害が改善されること」と「生活が楽になること」というバランスシートの上にある保護者の気持ちの理解を。

◆かわりの手がかり。具体的に何をするかを伝える。「ダメですよ」よりも選ばせる状況を作る。してほしくないことは、できないように先に環境を整えておく。評価の水準は勝手に変えない。個別の指導では、集団の場で楽になることを行ってほしい。支援者に対する支援というのは難しい問題。セルフケアの方策をたくさん持てるように。

◆からだ・気持ち・ことば。「こころ」を支えている 3 つの柱、「こころ」のバランス。ことば「思考」の部分に重きを置いて、からだと気持ちが疎かにされてはいないか。自分の身体の状況がわからなくなる。「今を緊張と言うんだよ」というように言語化してあげる必要が生じることもある。トラウマにさらされた子は、3 つをバラバラにして感じなくなるようにして自分を守る。負の感情は身を守るシグナル。

◆災害の後に来る感情。茫然自失、蜜月期、幻滅期。3 月の大震災は茫然自失の時期から一気に幻滅期へと至ったとても悲惨な状況。阪神大震災の時、子どもたちに現れた影響のピークは震災 3 年後だった。「もう済んだことだよ」ではなく聞いてあげる、気にかけているサインを送る。身体的な反応を認めてあげる。震災の裾野は広い。映像を見ている子どもたちがいる。以前の暮らしとの連続性がいかに安心をもたらすか。その子にとって安全な存在になること。その子のアンカー（錨）になること。

日本学校心理士会年報 第 3 号（2010 年度）の紹介

お手元に、日本学校心理士会年報 第 3 号（2010 年度）が届いていることと思います。神奈川県支部関連でも「輔導教師を中心としたスクールカウンセリングシステム～台北市小中学校モデルの検討～」 「中学校における特別支援教育の推進—一人ひとりの教育的ニーズに応え、共に育ちあう支援教育の実践—」 「中学生の学級活動における分業的協力および教師の援助的介入に関する研究」が掲載されています。いずれも、昨年度全国大会でのシンポジウムや発表を発展させて論文化したものです。このように、発表後も、その内容について整理し報告できる場として年報が編集されています。発表でいただいたコメントや意見を参考に、その内容を発展させて論文化に挑戦しては如何でしょうか。勿論、2010 年度大会概要も掲載されています。

2011年度（大阪）大会レポート

昨年度のあの暑かった東海大学の大会を思い出しながら、2011年度大阪大会に参加してきました。関東はこの8月20、21は涼しかったようなのですが、大阪は蒸し暑かったです。参加者は六百数十人と、昨年より百人くらい多いようですが、交通の便の関係もあるのでしょうか。千里中央駅から雨でもほとんど濡れずに行けるライフサイエンスセンターは狭いですが綺麗な会場です。さて、今回の目玉の一つは、ハーマソン博士ご夫妻(ニュージーランド)による講演とワークショップです。お二人の人柄がよく見える、実技やワークも含めた楽しいセッションでしたが、いかんせん逐次通訳では時間が倍かかってしまいます。提唱されている折衷型カウンセリングの理解には少し時間が足りませんでした。

次に午後のシンポジウムですが、「危機対応と学校心理士の役割」というテーマで、今回の大震災被災地区の各支部の報告です。いやあ、参りました。実はあまりの事実の重さに打ちのめされてメモすら取ることができず、涙してしまいました。我々がテレビや新聞で知っているつもりでいたことがいかに断片的、あるいは甘いものであったか……。北東北支部は必死で子ども達や教師の支援を行っていますが、「何年もかかる心のケアには現地の人間でないとできないことがある、そのときだけ派遣されてきた人間だけでは限界がある……。 」などの声が印象的でした。これは復興全体に言えることなのでしょうね。一時的な支援も大事ですが、ずっとつながる支援には現地での産業振興と人材の育成が必要なのです。もっと国を挙げてのシステムチックな復興策が必要です。

二日目は分科会ですが、私は発達障害系の講座に出席しました。内容を報告する余裕はありませんが、最も多い参加者で関心の高さが感じられました。

さて、来年度の大会は2012年8月20日(月)21日(火)、中部大学で行われます。愛知、三重、岐阜、静岡支部の協同開催となります。初めての関東、関西外での開催ですね。

(以上、レポーターは田村でした)



新役員（任期は平成23年度から3年間）

顧問：並木 博 内山 慶子

支部長：岡田 守弘

副支部長：田村 順一

役員：泉原 恭子 上杉 忠司 大草 正信 奥村 美由 川村 智子

北村 耕一 小泉 秀夫 斉藤 一政 佐藤 照明 塩野 優子

樽木 靖夫 仲手川 勉 平野 綾子 古屋 茂 古屋 美雪

三藤 敏樹 芳川 玲子

会計監査：渡田 典子 大里 朝彦 よろしくお願ひします

【編集後記】

神奈川支部ニューズレター10号を発行することができました。今回は、総会と第27回研修についての報告を中心に編集しました。昨年度は、3回のニューズレターを発行しましたが、今年度は年間2回の発行となります。研修の報告や各種情報をみなさまにお届けし、活動のサポートを行っていきたく考えています。神奈川支部ホームページと合わせて、今年度もよろしくお願ひ致します。

紙面に対するご意見ご要望をお待ちしております。また、投稿も歓迎です。

E-mail : ryoshi@keyaki.cc.u-tokai.ac.jp (編集部)